

幻想的な光の世界 ロウソク制作の現場から 高橋奈央 (2000年3月卒) *La N'bougie* 主宰

『'05fujirock festival』

キャンドルユニット melty candle との共同出展で2004年より参加しています。フジロックでもたくさんのお会いがあり、翌年の再会を約束しました。今年も出展する予定です。



(夢十夜)

夏目漱石の同名小説を朗読と映像で表現した短編映画『夢十夜～第一夜～』のひとコマ。

幻想的な雰囲気を出したいということで私のロウソクが使われました。



ロウソク制作のことなど

高校卒業後1年間のフランス滞在を終え帰国した私は、「何かを作りたい」という思いをもてあましていました。そんな時出会ったのが手作りのロウソクだったのです。

ロウソクは溶かして着色したら、後は固まるのを待つばかり・・・とても簡単に作ることができます。扱い易い性質で粘土のように花や人形などをかたどる作家もいます。私がロウソク作りでこだわっているのは色彩です。

単純作業の繰り返しとはいえ、繊細なグラデーションを出すには季節や天気が影響しますし、溶かした時と完成した時、その後、火を灯した時とは色合いがまるで違って見えます。

そしていずれ燃え尽きる、そんな風に最後まで変化し続けるモノだからいくら作っても飽きないのでしょう。

火をつけてこそ美しいロウソクを作り、様々な人やモノを照らすことが私の仕事です。



(絵のない絵本)

『絵本』をテーマにしたグループ展に出展した作品。作品に意味やタイトルをつけることに抵抗があった私には新しい試みとなる思い出深いロウソクです。

<主な活動>

都内ショップでの委託販売、カフェ、イベントスペース、映像等、様々な場面での空間照明演出に携わる。

R&B グループ Full Of Harmony シングル『YOU&I』発売記念オリジナルキャンドル制作 年数回の展示会
他 麻布十番 Gallery Café Bar 縁縁 enyen 原宿古着屋 TWO RIVER 渋谷 select shop FREERY PROSEED 等で取り扱い

散歩道となるパサージュ -

パサージュとは、「都市に見られる両側に商店が並んだガラス屋根で覆われた歩行者専用の抜け道」です。

前回に続き、パリの2区と9区に位置し、モンマルトル大通りをはさんで連続する三つのパサージュのうち、9区に位置するパサージュ・ジュフロワ(1845～47建設)とパサージュ・ヴェルド(1846年建設)をまず紹介しましょう。

パサージュ・ジュフロワ Passage de Jouffroy



パノラマから歩いてきてモンマルトル通りの信号を待ちながら、ジュフロワの入り口を見遣ると、パノラマの狭く低いパサージュに比して、幅広く天井が高く明るいパサージュの入り口が見えます。二つのパサージュの建設年が40年余り違うので、必然的に19世紀後半の建築技術の差が明白です。天井のガラス板の大きさも異なり、板ガラスの製造の歴史もみてとれます。入り口の右手には、ミューゼ・グレヴァン(蠟人形館)があり、入り口は大通りに面していますが、出口はパサージュの中になります。歴史上の人物などに似せた蠟人形を見ながら、過去の世界から日常の世界への出口を通ると、そこはまた、パサージュという非現実な場に身をおくことになるでしょう。

この心地よい「だまし討ち」に笑い出す客は多く、彼らはそのままパサージュの遊歩者となっていきます。パサージュにつきもののサロン・ド・テは、日本びいきのJean-Luc Valentin 夫妻の店です。開店してから10年近くになりますが、日曜日でもここで軽い食事やお茶ができるのが、観光客のみならずパリの散歩者には便利です。ステッキの専門店やドールハウスのキットの店、映画のポスターを扱う店などがあることも、古書店やアクセサリー店、玩具店などに混ざって、パサージュの雰囲気を出しています。ギャルリ・ヴィヴィエヌと並んで人出の多いパサージュと言えましょう。突き当たりにはショパンという名のホテルがあります。ここに泊まった方は、パサージュが私道であることを実感することでしょう。夜になるとモンマルトル大通りの入り口は閉められ、ホテルに戻ってきたときには、ベルを押すことになります。



パサージュ・ヴェルド Passage Verdeau

途中、鉤型に曲がるジュフロワを通りぬけると、狭い rue de la Grange Batelière を挟んで、ヴェルドの入り口まで一跨ぎです。ジュフロワと建設年は変わらないので、まさに連続したパサージュと言えましょう。商店はジュフロワに比して、マニアや蒐集家を対象とした古いカメラや絵画、アンティークの美術品などの店舗が並び、人出もずっと少なくなります。入り口付近のレストランを除けば、留まる人は少なく、通り抜けるひが目立ちます。通り抜けた先は Faubourg Monmartre で、人々はバス停に急ぐのです。またもう一歩足を伸ばして、メトロに乗る人もいますでしょう。名称はジュフロワ同様に人名です。

パノラマに始まり、ジュフロワ、ヴェルドと通り抜けていけば全長 400メートルですが、店を見ながら歩いていけば、優に半日がかりの散歩と言えるでしょう。パサージュの初心者が安心して歩ける三つのパサージュでした。

カリタス、フランス語、そして現在 三浦瑠理(2006年3月卒)上智大学 文学部フランス文学科在籍



カリタスの学舎を巣立ち、新しい大学生活をスタートさせて一ヶ月が経ちました。

現在私は編入先の大学で、フランス文学を専攻し、平行してフランス語の教育者になるための勉強も始めたところです。大学では、勉強の傍ら、有志が集まり、出来立てほやほやの演劇サークルを立ち上げたばかり。今後、大学内で行われる様々なイベント、例えばオープンキャンパスなどで、フランス語のお芝居を上演することになりました。手始めに、19世紀末から20世紀初頭に活躍した小説家・劇作家、トリスタン・ベルナルの喜劇『話すままの英語』(*L'anglais tel qu'on le parle*) の練習を始めたものの、まだ役どころは未定で、それぞれが興味のある部分を覚えながら自分に適した役を選び、演出など全体の形を今後組み立てていく予定です。

私は、幼稚園から短大まで、まだ20年に過ぎない人生のうちの、実に16年をカリタスで過ごしてきました。小学校に入り、フランス語の持つ美しさと、甘く心地よい音に恋をして以来、フランス語は常に私の生活の中心にあったのです。中学・高校時代は、特に『外国語発表会』や『フランス語フェスティバル』でのフランス語劇に参加したことが強く印象に残っています。机上の学習とは別に、演じることで、台詞を通してフランス語の発音に磨きをかけ、

仲間内の話で恐縮だが、「ダメ男」の話題でずいぶん盛り上がったことがある。エマニュエル・ボージュの拙訳が刊行された時のことだ。

エマニュエル・ボージュ、といってもご存じない方もおられるだろう。20世紀前半に活躍したフランス人作家で、まだ日本ではあまり知られていないが、その主要作品は様々な言語に翻訳されて世界中で広く読まれている。今回(といっても、もう半年ほど前になるが)、私が翻訳した『ぼくのともしち』はボージュのデビュー作であり、私はこれを「世にも哀しいユーモア小説」と呼んでいる。第一次大戦後のパリを舞台に、ともしちを作れない孤独な主人公「ぼく」の悲哀を綴った小説なのだが作者の筆致はいたってユーモラスで、迷走しがちな「ぼく」の怪しい言動には、思わず吹き出してしまう。

ある日、拙訳を世に送り出してくれた編集者のSさんから電話をもらった。都内の或る書店で、今回の翻訳刊行に併せて「イケてない男」フェアが開催されることになったという。「イケてない男」「ダメな男」の登場する古今東西の小説が、『ぼくのともしち』と並んで特設コーナーに展示されるらしい。「楽しみです。ね。(つまり、我々が『ぼくとも』の主人公も、ダメ男、イケてない男なわけか。)どんなラインナップになるのでしょうか？」Sさんとそんな話をし、受話器を置いてから同僚にもこの話をしたのだが、「盛り上がった」と言ったのはその時の会話である。皆、ダメ男については一家言ある様子で、「やはり『マノン・レスコー』のあの男でしょう」とか「筆頭格は『ロリータ』の中年男！」とか「『人間失格』の主人公をダメ男とは呼べないそのわけは……」などと勝手な意見が飛び交った。どうやら人の数ほどダメ男のイメージがあるらしい。なかには悪人とダメ男をほぼ同一視している人もいたが、それは少なくとも『ぼくのともしち』の主人公にはあてはまらない。「ぼく」は、誰にも相手にされずに一人で空回りしている人畜無害な男だ。あまりにもいじましく、不器用なところが、彼のダメ男たる所以だろうか。それに、向上心がみじんも感じられないところも……

そして私は、そんな無気力な「ぼく」に対して、郷愁にも似た懐かしさを覚えるのである。それは何故か、と考えてみると、一つには、留学中のあの数年間のせいかもしれない。あの頃、私は留学生とは名ばかりで、毎日、寝不足と二日酔いでボーとしたまま、パリ左岸の小さな部屋で、天井の染みを数えて暮らしたのだった。ふと立ち寄った本屋で『ぼくのともしち』の原書を手にしたのもその頃だったはずだが、読んで何を思ったかはもう覚えていない。ただ、今回、「ぼく」の〈ダメっぷり〉を日本語に訳していて、不意に自分自身のパリ生活が脳裏に蘇り、息の詰まるような思いをすることは度々だったのである。



エマニュエル・ボージュ『ぼくのともしち』
渋谷豊訳 白水社 2005年11月刊

より自然にフランス語を使えるようになったと思います。また、高校三年生の時には、かねてからの念願でもあったフランス語のコンクールに参加、ヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』の一節を暗唱し、先生方の特訓の甲斐あって優勝することができました。こうした体験をきっかけに、その後ますますフランス語の魅力にはまっていったのは言うまでもありません。

そのカリタスでの生活を締めくくる短大での2年間。私はここで初めて、フランス語だけでなく、何かを深く、主体的に学ぶ大切さを知ったように思います。本当に瞬く間でしたが、言い尽くせないほど思い出のギッシリ詰まった、内容の濃い充実した日々でした。毎日学校に通うのが楽しみで、進路は違えども、共に励まし、刺激し、時には意見をぶつけ合い、成長できた仲間、そして素晴らしい先生方にも出会えました。この2年間を支えてくれたのも、やはりフランス語だったのでした。

幼い頃、毎日ひたすらフランス語の詩や歌が録音されたテープを聞いて繰り返し練習しながら、とにかく楽しくて仕方がなかった感覚を今でもはっきりと覚えています。専門的な勉強を始めた現在でも、その頃の楽しさを忘れることなく、また今まで培ってきた経験を生かし、さらに知識を深めていけたらと思っています。今回執筆の機会をいただき、これまでの16年を振り返ることが出来たことに感謝しています。

住宅街に佇む不思議な映画館 “ La Pagode ”

テレビ、ビデオ、さらにDVDの普及により映画館まで足を運ぶ人々が減っている昨今。現在パリには大小含め110の映画館があり、さらにパリ郊外の映画館、特別上映を行う施設等を入れるとその数は300近くまで膨れ上がります。パリより広い東京の映画館数は約130ですから、パリが「映画の都」と言われる所以に思わず納得。映画館離れが浮き彫りになりつつも、パリジャン達にとって、やはり映画は手近な気晴らしの一つと言えるでしょう。



今回は数あるパリの映画館の中でも、個性的な映画館をご紹介します。

閑静な高級住宅街に突如現れるなんとも不思議な寺院のような建物。鬱蒼とした木々に囲まれ怪しげな雰囲気を出しているこの建物こそ“LA PAGODE (仏教寺院)”で、パリ7区にある唯一の映画館です。元々、1895年に、パリ最古のデパート“BON MARCHE”のオーナーが妻への贈り物として建築家に依頼し建てさせたもので、当時は社交場として栄え数々の祝宴やダンスパーティー等執り行なわれていました。その後1930年に映画館として改造され、一般の人々にも開放されました。開館当時は「la Salle japonaise」と言われる映画ホールのみでしたが、1973年には二つ目のホールが地下に作られ毎日2本の映画が上映されるようになります。1950年代には*art d'essaiの映画館として位置付けられ、さらに数々の*cinéma d'auteurの作品(特にベルイマンやエイゼンシュテイン)を上映する事でシネフィル(映画愛好家)達に愛されるパリの映画館の一つとなります。1986年には歴史的建造物として認



証され、その後、大手フランス映画会社“GAUMONT”が買収。1997年から一時的に改装工事のため閉鎖されますが、2000年に再びオープンし、現在は*CINECLASSIC経営の下、上映のプログラムが組まれています。

ウッディー・アレン、ペドロ・アルモドバル、ガス・ヴァン・サントなどの大御所から デプレシャンなどの若い監督の作品を上手く上映プログラムに取り込み、映画ファンを魅了しています。また、毎月一回、著名人をゲストに迎え“Ciné Club”と、題された上映会を開催。上映終了後はゲストとのティーチンも行われています。7区という落ち着いた場所にあることもあり、各界の著名人もお忍びとして映画を観に来ることもしばしば。さらにジャポニズ

ムの影響が伺える「la Salle japonaise」の内装は来る度に魅了され、一見の価値あり。

映画を観終わった後、庭園の木陰でゆっくりとお茶を飲みながらオリエンタルな雰囲気に包まれ、観終えたばかりの映画について議論し合うのも、“la pagode”の魅力の一つと言えるでしょう。

* art d'essai … 商業的ではなく芸術性の優れた作品また若手の監督作品を上映する映画館レーベル

*cinéma d'auteur … 監督の芸術的個性が反映されている作品

*CINECLASSIC … フランスの映画配給会社。“la Pagode”を含め、いくつかの art d'essai の映画館の上映プログラムを行っている

【編集後記】蠟燭のアルティガノ、高橋さんの工房は、河口湖畔の富士を一望できる閑静な一角にある。嘗てあざみ祭で買ったその初期作品は我が家に飾ったまま。未だ幽玄な光の世界に接していない。ノパリに留学して久しい秋元さんは、高橋さんと同学年。思えばこの学年には趣味人が多かった。在学中から映画への情熱は人一倍だったが、原稿を一読してその成長ぶりに歳月の重みを感じた。ノ三浦さんはこの三月に卒業し、上智大学入学直後の多忙な中寄稿してくれた。大学にすっかり慣れて、水を得た魚のように活躍している様子。これも一つの才能かと感服すること頻り。ノ渋谷先生は早稲田大学出身の学兄。文章中の氏の自己韜晦ぶりに騙されないように。フランスで博士号を取得した歴としたラボ-研究者。貴重な「ぼくの」飲み「ともだち」でもある。ノ稲葉先生には前号に続き「パサージュ」についての文章をご執筆頂いた。感謝の念を表したい。ノ今号は、見事纏まりを欠いた誌面となった。しかし、一人の駄目男が、不思議な映画館でベルナル原作の映画に心癒され、帰路立ち寄った「パサージュ」の「ショウウィンド」で揺らめく蠟燭の炎に涙する、などと勝手な想像を膨らませれば、フランスへの憧憬が結ぶ、一つの悲哀の物語が立ち上がる気がするのだが如何。(北垣)



Liaisons フランコフィルのための情報誌

第3号 2006.5.30

発行人 : 稲葉延子 (仏語・仏語圏文化専攻主任)

編集責任: 北垣 潔 編集協力: 内田香織



カリタス女子短期大学
言語文化学科 仏語・仏語圏文化専攻
 URL: <http://www.caritas.ac.jp/france/>
 携帯サイト: <http://www.caritas.ac.jp/i/>
 MAIL: inaba@caritas.ac.jp